

「男、突っ走る！」

第
110
回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (24)	『オフィスツリーイン』代表
木内 彦蔵 (83)	雅也の祖父
木内 好乃 (77)	雅也の祖母
若村 素子 (51)	雅也の叔母

1 広島木内家・台所

雅也、彦蔵、好乃が昼食を食べている。

雅也「このポテサラ、美味しいわ。うちでも
たまに母さんが作るけど、やっぱりこの味
だわ」

好乃「おばあちゃんが教えたんよ。この味は」

雅也「手が止まらなくなるもん」

好乃「よう食べたらよろしいで」

雅也「はいはい」

好乃「（彦蔵に）明日、素子来るそうですよ」

彦蔵「え？」

好乃「（少し大きい声で）明日、素子が来ま
す」

彦蔵「素子、来るのか」

好乃「この間、電話があっただじゃろ。雅がこ
っちに遊びに来とるけえ、素子も会いに来
る言うて」

彦蔵「なら、明日の昼は作らんでもええか？」

好乃「そうです」

雅也「明日、もっちゃん来るんだ」

好乃「毎月一回は、おばあちゃんたちの様子

見に、来よるんじや」

雅也「ふーん」

2 同・A和室

彦蔵が昼寝をしている。

3 同・台所

コーヒーを飲みながら話している雅也

と好乃。

雅也「明日、もっちゃん来るんだったら、行

ってほしいところあるんだけど」

好乃「それなら、素子に頼めばええわ。けど、

どこ行くんや？」

雅也「ひいおばあちゃんのお墓参り」

好乃「またどうして？」

雅也「ひいおばあちゃんが亡くなったのは、

うちが小学校の卒業式の前日の晩だった。

卒業式して、小学校への余韻に浸る間もな

くすぐ広島に向かってさ、あの時はバタバ

ただったこと、今でもよく覚えてるの。あれから十二年、だからこの間の命日で、ひいおばあちゃんの十三回忌だったんだよ。そのタイミングって言うこともあったから、向島に来ようと思ったの」

好乃「あんた、ようそんなこと覚えとるな。おばあちゃん、実の娘なのに覚えてへんかったわ」

雅也「小学校の卒業式の前日に亡くなったんだよ。嫌でも覚えてる」

好乃「雅がお参りに来てくれたら、ヒサコさんも喜ぶわ」

雅也「九十四で亡くなったけど、晩年は認知症も酷くなって、おばあちゃんも大変だったでしょ、介護するの」

好乃「まああん時は、大変じゃったわ。夜中にトイレに起こされたりして、ゆっくり眠れもせんと……」

雅也「人の区別もついてなかったよね？ 小学校の四年生か五年生の時、ひいおばあち

やんと会った時は、もう誰か分かってなかったみたいだったし」

好乃「そうやな。最後は娘の私が誰かなのかも分からんようになって」

雅也「確か、ひいおばあちゃんの旦那さんつて、戦死したんだよね？」

好乃「おばあちゃんが一歳半の時じゃったからね。だから、おばあちゃんも父親との記憶がないんよ。そっから、ヒサコさんは一人で苦労して……」

雅也「元々、九州の人なんだっけ、ひいおばあちゃん」

好乃「うん。大分の中津の魚屋の娘に生まれてね。三兄弟の末っ子で可愛く育てられたんじゃわ。そこから、広島に嫁いできて、結婚して、子供産んで。旦那を戦争で亡くすまでは、普通の暮らしをそつたんじゃけどね」

雅也「戦争未亡人ってやつになっちゃったわけでしょ」

好乃「そこからは、和裁で生計を立てたり、知り合いからミカンの木を譲り受けて、ミカンづくりに精出したりしてな」

雅也「段ボール箱に、よく大量のミカン届けてくれたっけ。小さい頃の記憶だけど、よく覚えてる」

好乃「生活のために、いろいろ苦労したみたいやけどね」

雅也「あの時代は、大変だったんだろうね」

好乃「終戦の年が、おばあちゃん三歳やったけん、正直覚えとらんのやけど」

雅也「それに、市内にいたら、原爆の影響だてあったわけだしね」

好乃「酷い時代だったんじゃ、あん時は」

と、和室から物音が聞こえてくる。

雅也「おじいちゃん、起きたみたいだね」

好乃「大体このお昼三時前後に起きるんよ」

雅也「それで、夕飯の支度するんでしょ」

好乃「そうなんよ」

と、ドアが開き、彦蔵が入ってくる。

好乃「起きましたか」

彦蔵「おお」

雅也「今日の夕飯は何するの？」

彦蔵「今日はお好み焼きじゃ」

雅也「出た！ 広島のお好み焼きだね。ちやんと麺入ってる？」

好乃「お好み焼きには、麺は入っとるもんじやろ」

雅也「それがね、愛知で売ってるお好み焼きは関西風ってこともあって、麺が入ってないの」

彦蔵「麺のないお好み焼きは、お好み焼きとは言わん。これが、本場広島のお好み焼きじゃ」

雅也「うちの父さんと同じこと言ってる」

好乃「孝志も言うとるんか？」

雅也「うん。だからうちでお好み焼き作るときも、本場の味だからって、中にちゃんと中華麺入れてる」

好乃「（彦蔵に）孝志も、麺使ってるって」

彦蔵「当たり前じゃ、わしが教えたんじゃけえ」

雅也「血は争えないね。その血をうちも継いでるから、お好み焼きに麺が入ってないと物足りないって思うのかもしれない」

彦蔵、立てかけてある大きな鉄板で支度を始める。

好乃「あの鉄板はな、おじいさんが造船場に勤める時に自分で作った鉄板なんじゃ」

雅也「そうなの？　じゃあ、どこにも売ってないんだ」

好乃「変なところにこだわりがあるみたいなんじゃ」

雅也「父さんもうちも、変なところにこだわりがある。やっぱり、おじいちゃんの息子と孫なんだろうね」

好乃「そういうことやね」

黙々と支度をしている彦蔵。

プランターに水やりをしている好乃。

5 同・B和室

小説を読んでいる雅也。

6 同・台所（夜）

雅也、彦蔵、好乃がお好み焼きを食べ
ている。

雅也「ああ、やっぱりこの味」

好乃「美味しいか？」

雅也「うん」

好乃「（彦蔵に）雅が、美味しいって」

彦蔵「そうか。どんどん食べ、若けえもんは」

雅也「はいはい、食べます」

好乃「おじいさんはな、雅に食べさせたいん

よ。滅多に来ん孫が来たんやけ」

雅也「五年も来てなかったんだもんね」

好乃「明日、素子にもヒサコさんのこと話そ

う。（と彦蔵に）明日、ヒサコさんの墓参
りに行きますよ」

彦蔵「墓参りか？」

好乃「そうです」

7 同・全景（翌朝）

8 同・台所

新聞を音読している好乃——雅也が入ってくる。

雅也「あれ、おばあちゃん。新聞音読してるの？」

好乃「頭の体操じゃ」

雅也「へえ」

好乃「お金をかけないボケ防止。横文字で意味が分からん言葉もあるんやけど、ちゃんと言葉を読むようにしとるんじゃ。おばあちゃん、携帯とかあんたが持つてる機械とか持つとらんじやろ。新聞とテレビしか、情報が見れんけえ、ちゃんと見るようにしとるんじゃ」

雅也「最後まで読むの」

好乃「ずっとそうしとる」

と、玄関のドアの開閉音が聞こえ、女性
性の声が聞こえる。

女性の声「おはようございます」

好乃「あ、素子が来たわ」

と、ドアが開き、雅也の叔母・若村素

子（51）が入ってくる。

素子「おはようございます」

雅也「もっちゃん」

素子「まあ君、しばらくじゃったな。えらい

立派になつて」

雅也「そんなことないわ」

素子「この間、理香にも会ってくれたんや

ろ？ ありがとうな」

雅也「ううん。こっちこそ、急だったのになり

かつちのマンションに泊めてもらつて」

好乃「（素子に）今日、昼ご飯行く前に、ヒ

サコさんのお墓行ってほしいんじゃ」

雅也「（素子に）今年で、ひいおばあちゃんが
亡くなって十三回忌でしょ。だから、ち

やんとお参りしたいと思つて。それもあつて、広島に来たの」

素子「そうか。もう永尾のおばあさん亡くなつて、そんなに経つんじゃない。早いなあ。確かあん時は、まあ君が小学校卒業式終わつて、すぐにこつちに来たんじゃもんな。理香も中学校の卒業式が終わつて、しばらくしてからじゃつたから、よう覚えとるんよ。けど、もう十三回忌なんじゃな」

好乃「一周忌の法事はしたけど、その後は私からも歳だし、大阪の姉さんもこつち呼ぶのも大変じゃ思うて、もう法事はしとらんのじゃ」

素子「そんでも、まあ君が来てくれたら、永尾のおばあさんも喜ぶわな」

と、ドアが開き彦蔵が入ってくる。

素子「お父さん、おはよう」

彦蔵「何や、もう来とつたんか」

素子「今来たところす」

彦蔵「墓参り行つて、そのまま昼飯食うんな

ら、もう出かける支度しないかんじやろが」

好乃「はいはい。そんなに急かさんでもよろ

しいわ」

素子「（雅也に）いつつも、こうなんじゃ」

雅也「この二日で、嫌ってほど見た」

9 道を走る乗用車

10 その車の中

素子が運転しており、助手席に雅也、

後部座席に彦蔵と好乃。

素子「この辺じゃったか？」

好乃「ああ、この狭い道を上っていくんじゃ」

素子、ウインカーを出して左折する――

――狭い山道を登っていく。

11 墓地

急斜面の山道の中にいくつもの墓石が

立ち並んでいる――雅也、素子、彦蔵、

好乃がやってくる。

墓石の一角にある『永尾家之墓』を見
つける。

雅也「あ、ここだね」

好乃、持っていた花を挿し、ペットボ
トルの水を墓石にかける。

好乃「ヒサコさん。今日はね、孫の素子と、
ひ孫の雅が来てくれたんよ。ヒサコさんの
十三回忌や言うて。良かったね」

彦蔵、線香に着火して立てる。

一同、合掌をする。

雅也、振り向く――住宅街と海沿いの
景色が一面に広がる。

N「曾祖母のお参りを終えた僕たちは、その
足で尾道市内に買い物へ出かけ、食事に行
きました。が、やはりコロナの影響もあつ
てか客足は少ないものでした」

12 広島木内家・台所

雅也、好乃、素子がコーヒ―を飲みな
がら話している。

素子「やっぱりコロナの影響なんやろか、全然おらんかったな」

雅也「仕事もこれから影響出るのかなあ」

素子「心配やな。それに、お兄ちゃんの会社、中国にも工場あるやろ。これから大変じゃろ」

雅也「そういえば、製造ラインが止まるとか何とかって言ってた」

素子「お兄ちゃんも大変じゃ」

雅也「広島も、どうなるんだろうね……」

好乃「理香は元気にしとるんか？」

素子「たまに様子見に行つとるけえ」

雅也「おばあちゃんたちの様子も、いつも見に来てるんでしょ」

素子「福山から車で四十分ぐらいじゃけえ、大したことはないわ。それに、二週間前に来たけど、この間おばあちゃんから、雅が一人でこつちに来る言うけん、せっかくやし会わないあん思うて」

雅也「もつちちゃんと会うのも久しぶりだもん

ね。昔は、毎年ずっと集まっていたのに、仕事とかいろいろ忙しくなっちゃって、全然こっちにも来れなくて。コロナの影響でスケジュールが真っ白になったから来れたものの」

素子「それでも、よう来たわ、一人で」

雅也「昔さ、ひいおばあちゃんの家の近くに海水浴場があったじゃん」

素子「今も、夏になったら海開きしとるで」

雅也「まだ残ってるんだ、あの海水浴場」

素子「ようみんなで行ったもんな。ちょうど

永尾のおばあさんのところで集まって」

雅也「多分、あれはうちもりかっちも小学校の頃だと思うんだけど、スーパで浮き輪買ってさ、りかっちが膨らまそうとしてるのに全然膨らまないの。で、うちの父さんが見てくれたら、浮き輪の端が切れてたの。原因は、りかっちが浮き輪を袋から開ける時、ハサミと一緒に浮き輪も切っちゃってさ。そりゃ、空気入らないよね」

好乃「へえ、そんなことあったんかね」

雅也「あとさ、海の家でかき氷買って、そのまま持ち帰ろうとしたことがあったんだけどさ、ちょうどあの時、うち、もっちゃん
の車の助手席に乗ってたの。それで、助手席のドリンク入れるところにかき氷を置いたのは良かったんだけど、時間が経って氷が解けちゃうわけよ。そうすると、裸足でビーチサンダル履いてるうちの足に、その氷が直撃して。これが冷たくて冷たくて」

好乃と素子、声を出して笑う。

雅也「あれは、もうとんだ事件だったよ」

素子「いろいろ出かけたもんね、あの時は。」

永尾のおばあさんも一緒に出掛けた時もあったっけ」

好乃「四世代の家族が一緒に出掛けたなんて、今じゃ凄い話じゃな。ヒサコさんも、娘夫婦に孫、ひ孫と一緒に出掛けられて、幸せだったかもしれんな」

素子「そうやな」

好乃「何より、ひ孫の雅が十三回忌をちゃんと覚えとったことが、一番喜んどるかもしれんわ」

雅也「本当に今回来れて良かった。それに、このままコロナが悪化したら、次いつ来れるか分かんないもんね」

素子「私も、久しぶりにお兄ちゃんに連絡しとこうかな」

好乃「あんたからも、孝志にいろいろ言うたって。私の言うことなんて聞かんけえ」

素子「妹の私の言うことだって聞くわけなからう」

雅也「(時計を見て)あ、そろそろ荷物の支度しなきゃ」

素子「新幹線の時間、何時？」

雅也「いや、特には決めてない。夜に愛知戻れたら良いと思ってるから。遅くても六時とか七時台の新幹線に乗れば」

素子「けど、お土産も見た方が良いやろ。私、福山駅まで送ってくわ」

雅也「良いの？」

素子「そりゃええに決まっとるわ。叔母ちゃ
んらしいことさして」

雅也「ありがとう」

13 同・表

素子の車が止まっている——運転席で
エンジンをかける素子。

後部座席にスーツケースを入れる雅也。

彦蔵と好乃が見送りに来ている。

雅也「お世話になりました」

好乃「ほんまによう来てくれたわ」

雅也「向こう着いたら、また連絡する」

好乃「仕事、頑張るんやで」

雅也「うん。（と彦蔵に）じゃあね、おじい

ちゃん」

彦蔵「おお。まあ頑張れや」

雅也「うん」

と、素子の車の助手席に乗り込む。

素子、運転席側の窓を開ける。

素子「ありがとう、じゃあね」

雅也「じゃあね」

素子、車を出発させて出ていく——い
つまでも見送っている彦蔵と好乃。

14 道を走る乗用車

15 その車の中

助手席の雅也と、運転席の素子。

雅也「おばあちゃんたちの前では言わなかつ
たけど、りかつち、まだあのお店に残るみ
たいだね」

素子「おばあちゃんたちには、歯科衛生士を
続けてることにしてるからね。まあ君にも
変に気遣わせてごめんね」

雅也「いや、別に良いんだけどね」

素子「理香も、そろそろ落ち着いてほしいん
だけどね」

雅也「ああ、耳が痛い」

素子「まあ君は大丈夫じゃろ」

雅也「そうでもないよ」

素子「またこっちに遊びにおいで。次はケンちゃんも一緒に」

雅也「うん、その時はまた連絡する」

N「叔母に福山駅まで送ってもらい、夜には愛知に戻ってきました。まもなく新年度を迎え、仕事も『スリジェネ』も頑張ろうと思っていたのですが、愛知に戻った翌朝のこと……」

16 木内家・居間（翌朝）

呆然とテレビを見ている雅也。

N「国民的コメディアンがコロナで亡くなったという衝撃のニュースを目にし、ますますコロナの存在を脅威に思うようになったのです」

つづく